

日本における動物園図書館の実態

弘中 瑞季

動物園には、レクリエーション・種の保存・調査研究・教育という四つの役割がある。日本の動物園は、動物園は単なるレクリエーション施設としてだけではなく、教育や研究の場として十分に機能できるようになることが今後の課題だ。特に教育という面において、大きな役割を果たす可能性があるのが、動物園図書館である。しかし、これまで動物園図書館はあまり注目されず、その研究は日本では積極的に行われてこなかった。本研究では動物園図書館の蔵書や利用状況などに関するデータを収集することでその実態を把握し、動物園における図書館の可能性について考察することを目的とする。

調査は日本動物園水族館協会に加盟している動物園 89 園を対象に、郵送によるアンケートで行った。2023 年 1 月現在、65 の動物園から回答があり、回収率は約 73% だった。この実態調査により、日本における動物園図書館の課題が見えてきた。一つ目は、動物園図書館の整備が進んでいない点である。動物園図書館への力の入れ具合はそれぞれの動物園によって大きく異なっており、そもそも図書館を設置している動物園が少なく、65 園のうち 34 園と半数以上が図書館を設置していない。動物園図書館の整備には時間も人手も費用もかかるため、なかなか進んでいないというのが現状である。二つ目は、スタッフである。動物園図書館の専任スタッフはほとんどおらず、他の業務との兼任が主流であることがうかがえる。また、司書が少ないことも課題である。分類記号を付与している館や何らかの目録を作成している館は全体的に少なく、専門の知識を持つ司書がいなくてできないことは多い。三つ目は、予算である。動物園図書館の予算は、他の専門図書館と比較しても少ないことは明白であり、特に公開図書館では半分以上の図書館が 0 円という予算の中での運営を余儀なくされている。営利目的が大きい私立動物園では、図書館を設置している園が 2 園と少なく、特に整備に費用のかかる公開図書館を設置している園がないことから、利益の出ない図書館の運営の大変さがうかがえる。

これらの課題は、動物園図書館の重要性が浸透していないことに起因するものが多い。一方で、講演会や読み聞かせといったイベントを積極的に実施し、利用者に動物への興味を持ってもらうような取り組みを行っている図書館や、専門知識を持つ司書を中心として、本を読む場の提供だけではなく本の貸出も行っている図書館など、教育の場として機能している図書館も少数ながら存在する。また、図書館自体は大規模なものではなくとも、職員の動物や動物園に関する情報へのアクセスを補助し、動物園来園者の関心を引き動物について学び考える機会を与えるような動物園図書館は少なくないはずである。動物園図書館の価値と重要性についてそれぞれの動物園で今一度考えてみる必要がある。

(指導教員 池内 淳)